

## 心の片隅に

徳島県 石井町石井中学校 3年  
綱木 千尋 (つなぎ ちひろ)

私たちが大人になる頃には、五人に一人が発症されると言われる認知症。人や物の名前を忘れてしまったり、自分が何がしたいのかわからなくなったりするのが代表的な症状です。私が認知症について考えるきっかけとなったのは祖母の存在でした。

私の祖母は認知症です。数年前、突然発症しました。それまではとても元気で、かるたをしたりおにごっこをしたり、たくさん遊んでいたのに、祖母が認知症を発症して以来、一緒に何かをした覚えがありません。でも、遊ばなくなったのは、認知症だけのせいではなくて、私自身にもありました。

私は、祖母が認知症だという事実を受けとめることができませんでした。祖母は、私が小さかった頃から大切に育ててくれていました。何かに挑戦したり頑張ったりしたときは人一倍褒めてくれ、応援してくれました。でも、悪いことをしてしまったときは、「それはしてはいけない」と真剣に叱ってくれました。優しくて憧れだった祖母の、大好きな笑った顔が、気がつけば無表情になり、話もなくなって、いつしか家族の喧嘩の種になっていきました。そんな祖母を私はだんだん避けるようになりました。

祖母の症状も次第に進んでいき、急に怒り出すようになり、最終的には私の名前が思い出せなくなりました。状況が重なるにつれ、私の心の余裕もなくなり、祖母に苛立ってしまうときもありました。楽しかったご飯の時間も見違えるほど静かになり、祖母どころか家族とも会話する機会が減っていきました。喧嘩をしないようにと気を遣って誰も話さないのはわかっていました。けれど、家族に見えない壁ができたようで無性に寂しくなり、前はあんなに楽しかったのにと感じてしまう自分もいました。そのギャップに心が追いつかず、ご飯が喉を通らない日もありました。

そんな日々が続いていたある日の夕方、祖母に散歩に誘われました。私は正直、少し戸惑いましたが、久しぶりだったので行ってみました。散歩中、道ばたに咲いている花や綺麗な空の話をしました。何度も何度もその話が繰り返されまし

た。私は「さっき言っていたのにまた言ってる……」なんて徐々に思ったりしました。

そのとき、急に祖母が「何歳になったんで？」と聞いてきました。すでに苛立ちが募っていた私は、「十三歳。」と怒り混じりに答えました。すると、祖母は優しく微笑んでこう言ったのです。

「背大きくなったなあ。小さいときはずっと泣ききよったのに。ばあちゃん嬉しい。ちひろが成長して嬉しい。」と。

頭が真っ白になりました。忘れられていると思っていた名前も、昔の思い出も、全部覚えていてくれたんだ。私は泣きそうになりました。それと同時に、ずっと避け続けてしまったことを謝ろうと思いました。その帰り道は、何回同じ話をされても嫌だとは思いませんでした。

ずっと変わってしまったと思っていた祖母は、昔も今も変わることなく大好きな祖母で、名前やしたいことを忘れても、私が大切にしている思い出は祖母の心のどこかにあるんだなと思いました。

その後、母にこの出来事を話しました。母はとても驚いていましたが、「散歩してよかったね。そういえば最近全然話せていなかったなあ。」とつぶやいていました。このことがきっかけになり、母と一緒に認知症のことを調べました。誰かと話すことは認知症の人にとっていいことなのだそうです。共感したり、相づちをうって聞いたりすることで安心し、嬉しくなってさらに症状の進行を遅らせることができるそうです。母によると、私の知らないところで、登校するとき祖母がいつも心配してくれているとのことでした。そんな優しい祖母に、今度は私が恩返しする番です。祖母がまた、散歩の時のような笑顔になってもらえるように、今からできる「話すこと」から始めようと決心しました。

認知症になったという事実は、今もときどき受け止めきれない時があります。しかし、どれだけ祖母が私のことや家族との思い出を忘れても、私は大好きな祖母を絶対に忘れません。そして、今もこの先も私と向き合い、ずっと大切に育ててくれたように、私も大切にしていきます。また、共に祖母と向き合い受け止め、そのうえ私のことも支え応援してくれる家族に感謝し、大切にします。

この先、認知症になる人は増えていきます。私もなるかもしれないし、周りの人になるかもしれない。けれど、どんなときも誰であっても、しっかり向き合っ

て大切にしたいです。だからその第一歩として、明日祖母に笑顔で

「おはよう。」

と話しかけます。